スポーツボランティア・フリートークフェスタ　その３
２００４年2月２２日（日）　仙台市市民活動サポートセンター
１３時３０分　～　１４時５０分

パネルディスカッション（速報）

コーディネーター　村松淳司さん（グランディ・21 ボランティア）
宮川弘恵さん（横浜国際総合競技場ボランティア）
金子法泰さん（Alliance2002 新潟）
武田均さん（仙台市市民局スポーツ交流課長）
金田幸夫さん（グランディ・21 副所長）
（以下敬称略）
テーマ「スポーツボランティア現在・過去・未来」

村松：自己紹介と、ボランティアのあり方に関しての一言を。
宮川：競技場ボランティアを 6 年経験。「楽しむことを一番に」という心構えで。今年は部会制を取り入れつつ、新しいことに挑戦していきたい。
金子：「蹴る・語る・楽しむ」がコンセプト。楽しむことのひとつがボランティア。皆に出会って感情を共有することの楽しみ。ボランティアの負担が大きいクラブだが、そこを楽しみに変えていきたい。形は違うけれど、我々も「サポーター」と考える。
武田：プロを含めたスポーツを市民に広げるため、教育委員会から異動。10 年スポーツにかかわってきた。外からベガルタを見てきたが、今後は中からかかわっていく。
金田：プレーヤー・監督から、施設を預かる立場へ。ボランティアというかかわり方について今後も勉強していく。

村松：2002－03 の活動内容についてお聞きしたい。
宮川：F マリノスと JAWOC ボランティア（場内案内）を行った。本番では競技場のボランティアが中心になっていた。
金子：元 JAWOC ボランティア。前年のコンフェデレーションカップの後、アルビレックスのボランティアリーダーを交えて何度も確認を行った。決勝戦の日は脳性まひ者の日本対韓国の試合も。W 杯後はサッカー熱が冷めることを危惧し、ゴール裏の人々と今後の盛り上がりに関して話し合った。観客は増えたがボランティアが増えない現状に対し、クラブとともに改善策を考える。今後はゴミプロジェクトも展開していく。昨年は松本での甲府戦でボランティア交流を行った。双方の刺激になり、お互いを見ることができた。
村松：脳性まひ者サッカーについてのエピソードを。
金子：行政の協力が得られなくて残念だったが、やってしまおうという心構えと、韓国側の寛大な協力があって成り立った。

武田：4 試合 W 杯を観戦した。鹿島でイタリアのイタリアの試合も見た。それらを肌で見た経験を、今後のサッカー運営に活かせるように努力。そのため今は試合を見ることがなかなかできないが、今後のために必要なことと考えてみる。ボランティアについては試合前からの業務状況をよく見ている。
村松：行政から見たベガルタボランティアの状況とは。
武田：燃えない県民市民が、ボランティアが核となっての街づくりに燃えるようになった。
金田：国体でボランティア研修をしたが他の仕事で参加できず。W 杯は３試合観戦。雰囲気を味わったこと、日本がベスト 16 に入ったことの貴重な経験を大事にしたい。そのためにもスタジアムの今後の利用法を考えていくのが私の仕事。
村松：施設側から見たベガルタ戦での問題点は。
金田：アクセスが悪いという評判がなおのこと心理的距離を遠ざける。アクセスについては他の競技場でも苦労している。近いはずの長居や国立でも、5 万人も集まれば大変だった。

村松：現在について。新潟での一番の苦労とは。
金子：マンパワーが一番の問題。35 人中 15 人くらいが実働部隊。結構一人で何役もやることが多い。活動の場所がないことも問題。事務局は皆が語れる場所とは言いがたい。ファミレスや公民館で意見交換をしている。活動目的を言いっぱなしにならないように調整す

ることが難しい。要求だけで終わるグループにならないようにしたい。
村松：「語る」場所の存在は重要。言いっぱなしに関しても調整が必要。以前キックラブでは言いだしっぺを責任者にする原則があったが、今度は言い出す人が減ったし。
村松：国体ボランティアとベガルタボランティアの違いとは。
武田：国体は市民と行政の共同作業的。15000 人が手伝ってくれた。「いつ・どこで・なにを」やるのかの説明で時間をずいぶん使ったが、本番では大きなトラブルはなかった。打ち合わせで密なつながりがあった。昨年度は七つの国際大会があった。女子バスケの大会のように成功をほめられた大会も。それぞれの大会に存在するボランティアが大会を積み重ねて進化して行った。ベガルタは個人参加型と思う。自発性を考えてみると、国体以上に進化を見せていると思う。

村松：イベントボランティアの進化に関して。
金田：国体は上から言われて組織したボランティアという側面があった。熊本では親密なボランティアが組織された。だが大会が終わったらそのつながりがどうなるかということも見ていかなければならない。W 杯、宮城の場合はもう少しお祭り的な側にもボランティアが参加してもいいかなと思った。楽しみの共有も入ってくるといいのでは。
村松：横浜国際総合競技場の場合について。競技場のボランティアとチームのボランティアの違いは。
宮川：99 年からボランティア募集。98 年国体ボランティアが中心となって募集。当初は W 杯が目標という側面が強かった。チーム付きのボランティアはチームが好きというところで意識が共通していたが、競技場の場合チームのため・横浜という街のためなど目的が違っている。2002 年が終わると雰囲気が変わってきた。更新者が減った。新しい問題が発生した際話し合いを持ったが、目的意識の違いが一番問題になった。ここが競技場ボランティアの苦しいところだが、逆にサッカーに限らないイベントにかかわれることで発生する相乗効果という長所もある。
村松：未来の話。ボランティア同士の緩やかなネットワークがこれからは求められるが、それに関しての意見は。
宮川：J リーグ以外の市民イベントのボランティア要請が時々ある。企画からボランティアが行うという試みを昨年始めた。鶴見川ウォークラリーなどを提案。この活動を通して充実感を得られた。いつもの活動をうまくやることだけでなく、自分たちで主体的にものを

やったということは貴重な経験。スポーツに限らないイベントも貴重な経験。

村松：グランディア 21 ボランティアへの意見は。
金田：無報酬オンリーのサポートと認識してきたが、そんな単純なものではないことが分かった。ピッチ解放などで 10000 人以上がスタジアムにやってきた。職員だけでは手が回らないのでボランティアのかたがたに助けられている。場内整備や、植樹等の美化でも。こういうボランティアの尽力がなくてはこういう施設は成り立たないのだなと認識した。グランディボランティアは「楽しく」活動している印象。

村松：新潟でも競技場ボランティアができるとか？
金子：試行錯誤中。昨年 8 月にボランティアサロンを行ったが、スタジアムボランティア制度そのものに対する認識がまだまだ低い。行政側も壁を感じている。今はその前に、チームボランティアを増やそうと思っている。多種多様な活動内容によっていろいろな考えを持つ方々が集まれるという点でスタジアムボランティアの存在は重要だと思っているし、だからこそ新潟にも作りたいと思っている。

村松：仙台スタジアムボランティアを作るとしたら気をつけるべきことは？
武田：活動の場として有意義と思う。施設見学者も多いし、ベガルタボランティアのように施設を熟知する者も多い。試合以外に施設そのものに触れたい人もかなり多い。仙台スポーツ元気プランを昨年作成した。スポーツに関して尽力している方々のゆるいネットワーク作りを考えている。そういった人々の集まる場のひとつとして、仙台スタジアムという場を活用できればいいと思っている。

質疑
Q:スタジアムとの／ボランティア同士のコミュニケーション状況は？（→宮川さん）
宮川:競技場とはいつも話し合っている。できるできないは明確に指摘してくれる。360 名ほどのメンバーには郵送での連絡が多い。情報誌やアンケートも活用。ただ急なものに関しては対応しきれないことも。部会制発足に伴いサイト立ち上げも検討中。
Q:人･者･金のうち運営費はどのような状況か。
宮川:競技場内で取った予算（約１５０万）の枠内でやっている。（アンケートの往復はがき

代・ユニフォーム・研修費など）

Q:グランディボランティアは所在場所が宮城県。ベガルタボランティアは仙台市。スタジアム使用については県と市があれこれごたごたしているが、ボランティアにとっては市も県もなく連携したいところ。そこで、市と県とでボランティアを含めた行政同士の交流は今後どう考えているのか。
金田:ベガルタの試合を宮城スタジアムでやると 4 倍の経費がかかるので、ベガルタ運営会社側にとっては悩みの種。しかし仙台スタジアムのキャパシティの問題を解決するには宮城スタジアム開催も必要。こういった企業努力も関係してくるので、市と県の関係以外の要素も重視する必要がある。
武田:ベガルタの経営と、市･県の財政状況の兼ね合いもあっていろいろ難しい。ただやはりベガルタの考え方が一番優先されるべきだと思う。
村松:市と県のボランティアのネットワークに関しては現況は。
金田:まだ県は団体によって情報発信の度合いが違うので、長期的課題。
武田:範囲を市に限定せず、県やそれより広い範囲でネットワークを作りたい。

村松:簡単なまとめを。
W 杯などのイベントをきっかけにボランティアの意識もずいぶん変わってきた。上からの組織作りが、自発的なものになっていった。VVN のようにイベント主催も行うところまで出てきた。スタジアムボランティアができればさらに活動は進む。行政やクラブに対してもボランティアが一対一で付き合えるようになっていくとよいのでは。そのためにもいろいろなボランティアグループがネットワークを作って、情報交換が進むことが理想。